

進路指導最前線

教師は、何を目標し、どう動いたのか？

4 小論文指導

考える力を養う系統的な指導

諫早高校

諫早高校の取り組み

1、2年次に読む力を身に付けさせる
始業前の10分間を活用して「1年次は「コラム読み」、2年次は「音読書」を実施。1日にすべし、わずかな時間ではあるが、毎日積み重ねることで、生徒はかなりの読書力を身に付けることができる。

素材収集の必要性を 実感させると共に 進路意識を高める

長崎県立
諫早高校
明治44年創設。生徒数約1160名。毎年現役で200名以上の国公立大合格者を出しており、99年度入試では現役で東京大、京都大、大阪大合わせて8名、長崎大41名、山口大20名、九州大12名など、計219名の生徒が国公立大に合格した。部活動も盛んで、特に女子駅伝は全国大会に連続出場するなど、全国でもトップクラス。

1 素材収集を通して進路意識を高める
中身のある小論文を書くための
素材収集の方法について、教師自らも工夫を凝らして実践。生徒たちにも自分の興味あるテーマ、素材を集めてほしいと、進路意識を高めることを期待した。

2 3年次の集中小論文指導
今年の3年生は7月の面談週間を利用して、小論文書き方基礎講座、共通課題による演習、生徒同士の相互作品評価、素材収集の方法など、集中的に小論文指導を実施。
これにより、小論文を書く上でのポイント、素材収集の必要性と方法などを体得させた。



「臓器 移植って、何だっけ？」

問題用紙を見た瞬間、戸惑いを感じた生徒は少なくなかったはずだ。

7月15日、面談週間中の午後を利用した3日間の集中小論文指導の2日目、諫早高校の3年生全員は、共通課題による小論文演習に臨んだ。出題されたテーマは『臓器移植』について自分の考えを400字程度で述べなさい。生徒たちも、新聞やテレビを通じて何らかの情報は仕入れているはずである。だがこれまで、漫然とこのニュースに接してきた生徒が多かったのではないだろうか。

60分の制限時間が終わり、小論文委員会のメンバーの1人である野口新一先生は、集めた答案をめぐりながら「やっぱりな」という思いを抱いていた。中には、臓器移植の現状と問題点を踏まえ、自分の意見をきちんと主張できている生徒もいる。しかし大方の生徒は、少ない知識でこまかしながら原稿用紙の升目を埋めている様子が見える。400字の規定文字数に達していないものもかなり目立つ。野口先生は少しがっかりはしたが、その一方で「ねらい通り」と思った。

「小論文はそのテーマに関する知識がないと書けない。自分の考えも持てない。今回の演習では、生徒たちにそのことを実感して欲しかったのです。そして夏休み中の素材収集に対する



意欲へとつながった。だから、あえて文理科で最新のテーマを出題しました(野口先生) 諫早高校では 低学年次から文章を読む力の養成には力を注いでいる。今の3年生も1、2年次には、始業前の10分間を使って「コラム読み」を続けてきた。教師が新聞や雑誌の中から「これは」と思った記事を切り抜き、生徒に読ませてきたのだ。また今の2年生は、同じく朝の時間を利用して「音読書」を実施している。本は「自分のためになるもの」を自由に選ばせている。1日10分と考えるとわずかだが、1年間に積

小論文はその書き方が分かっていたとしても、背景となる知識がないときちんと書けない。このことを生徒に気付かせ、素材収集へと意欲を高めるのが、3日間の集中指導の目標だ。



諫早高校進路指導主任
尾崎健次 Ozaki Kenji

昭和32年大分県生まれ。英語科担当同校に赴任して11年目。「小論文委員会」のメンバーとして、また進路指導主任として、同校の小論文指導を牽引している。



諫早高校小論文委員
野口新一 Noguchi Shinichi

昭和40年長崎県生まれ。国語科担当同校に赴任して7年目。現在3学年のクラス担任をしており、3年生を対象とした小論文指導では中心的役割を果たしている。

算すればかなりの読書量になる。
3年次に進級してからは実際に書く作業が始まる。まず6月の「200字要約課題」で小論文への意識付けを行う。自分の進路に関係のある分野のニュースを取り上げ、200字程度でまとめるというものだ。

そして7月14日、この日は「200字要約課題」の優秀作品発表を兼ねて小論文書き方基礎講座と相互評価の方法についての解説が行われた。翌15日は前述の「共通課題」による小論文演習。そして最終日の16日には、演習で書いた小論文を4、5人の生徒同士で相互評価させ、優秀作品を選ぶ。その後全員を体育館に集めて、素材収集の必要性とその方法が提示された。

これらの取り組みを短期間に集中させたのはねらいがあった。進路指導主任で小論文委員会のメンバーでもある尾崎健次先生はこう語る。「一連の作業を有機的に結び付けたかったん

教師は、何を指導して動いたのか。

です。初日に6月の2000字要約課題をたたき台にしなが、基本的な書き方を指導しました。文章を組み立てる上では、テーマに対する賛成・反対の立場をはっきりさせること、その意見を説得力あるものにするためには具体的な事実を挙げていくことが大切なことを伝えました。また、最終日の相互評価を『構成、論理性、独創性、表現力』の四つの観点で行うことを事前に解説しておくことで、自分が書くときもそれらを意識させるねらいがありました。2日目は具体的なテーマに対する小論文を作成。しかしテーマに関する知識がない生徒は、きつと四苦八苦したはず。そこで最終日は、書き方は分かっても知識がないと中身のある小論文は書けないこと、知識を得るには日頃から新聞や書籍に丹念に目を通しておくことが大切なことを相互評価を通して実感させたかったのです。

最終日、

生徒たちは各クラスで相互評価を終え、体育館に集まってきた。教室で他者の文章を読み、優秀作品を選んだ生徒たちは「小論文には知識による裏付けが大切」ということを自分の作品と比較しながら痛感できたようだ。相互評価では「その人のよい点だけを見つけないこと」という条件でコメン

トも書かせている。他者の小論文から何かを学び取り、さらに小論文を書くときに重要な観点を意識させたいというねらいだ。

尾崎先生は、優秀作品の一つとその評価コメントを読み上げると、こう呼び掛けた。

「みんな、この2日間で『中身のある、自己主張できる小論文を書くには、そのテーマに関する知識が重要』ということを実感できたと思います。そこで、これから夏休みにかけて、小論文のための素材収集をやっていきましょう」生徒たちは「知識がないと書けない」ことを体験を通して既に実感できている。しかし、では具体的に何をどうすればよいか戸惑っている様子だ。そんな生徒たちの前で尾崎先生は大きな段ボール箱を三つ取り出した。

「この中には、1学期の間に新聞などから小論文に出題された記事や先生たちが切り抜き、それぞれ100枚ずつコピーしたものが番号順に入っています。その種類はもう300近くになりました。テーマ別に記事を一覧にして、段ボール箱と同じ番号を書いているので、興味を持った記事のコピーを持って行きなさい」小論文の出題テーマは多岐に渡る。小論文のための素材収集をどのようにすればよいかを

グループに分かれて、小論文の内容を吟味していく。小論文を書く際の観点を意識しながら、生徒たちは他者の意見、論理構成も学んでいた。



迷っていた生徒たちだが、段ボール箱を見た途端、表情が変わった。

「だけど、これも先生たちが興味を持ったテーマだから偏りがあります。夏休み、皆でもっと幅広いテーマで素材を集めて欲しいんです」

生徒たちは大量の資料に度肝を抜かれたような表情をしている。「解散」の声と同時に、何人も生徒がステージの前に置いてあった段ボール箱の周りに集まってきて、コピーの山を興味深そうに見ている。「いつの間にかこんなに集めたの？」と驚きの声が生徒たちから漏れた。どんなものから情報収集ができるのか、その答えの山が目の前にあったのだ。

諫早高校が

夏休み前のこの期間に、3年生を対象にした集中的な小論文指導を実施したのは、実は今年が初めてである。同校では97年度に進路担当で国語科、地理、理科、家庭科の代表計6名で小論文委員会を発足。指導には教科を越えて何人も教師が当たったが、異口同音に発するのは「書く以前に、テーマに対する基礎知識がない。だから付け焼き刃の対応しかできない」だった。尾崎先生も同じことを感じていた。確かに小先生技術だけでも

段ボール箱の中は科目別に区切られ、通し番号が書かれている。記事のコピーはその番号で管理されており、記事を探すのも容易になっている。



入試である程度の点数を取るところまで、生徒の力を引き上げることはできる。だが生徒にはその先の能力を身に付けさせたいと言つ。「アメリカの大学に1年間留学していたことがあったのですが、向こうではレポートを発表して、それを皆で議論しながら研究を進めていくんですね。書く前には、テーマについて徹底的に考えなくてはいけないし、書いた後も、徹底的に考えることを強いられる。質の高い内容にするために、たくさん知識も吸収しなければいけない。学ぶ力とは、そうやって鍛えられていくことだと思います」

野口先生も小論文指導を、単なる受験対策に終わらせたくないと言つ。「小論文指導は進路研究の一つです。自分の進路に関連する分野で話題になっていることについて情報を収集し、考察を深め、自分の意見を書くことによって、その分野に対する意識を高めることができます。志望校を決めると言われて迷い、決めた後も何度も揺れ動く。そういう生徒に自分の将来を根底から考えさせる手段として、小論文を活用していきたいのです」

3日間の

集中小論文指導後、生徒たちは志望学部ごとのテーマ調べや素材収集に取り組みことになる。これは昨年度までは国公立大の2次試験直前に行われていたものだが、「この取り組みでその分野を学ばないという気持ちがいよいよ強まった」という声を生徒たちから聞いていた。だからこそ今年度は、指導を早くからスタートさせたのだ。

だが、先生方は現状に満足していない。「まだ取り組みが遅過ぎますよね。進路を見つめ直す機会という意味でも、来年は3年生になる直前の春休み前に行いたいです。学年末考査が終わった時期なら生徒たちは精神的にも余裕がありますから」(野口先生)

そして1、2年生が毎朝続けている「コラム読み」と「一斉読書」の改善。現状だと読み放しになっている点が課題だと言つ。「1日10分間でも、2年間続ければかなり読む力は付くと思います。でも、それが表現力の養成につまづ結び付いているかと言つと疑問が残ります。読む行為を書く力に接続していけるような工夫が必要ですね」(尾崎先生)

今、考えているのは「コラム読み」に要約や感想を書く作業を、「一斉読書」に書籍紹介の作業を取り入れること。これにより、読んで終わりではなく、内容に対する自分の意見を深め、それを文章にする能力を身に付けることができる。さらに、「一斉読書」では書籍紹介の優秀作品を教室に掲示することで、他の生徒の視野を広げる仕掛けとしても活用したいと考えている。

諫早高校の小論文指導の特徴は、各取り組みが効果的に結び付く仕掛けを作ろうとしている点にある。「コラム読み」や「一斉読書」に書く行為を加えることによって、3年間を見通した小論文指導にさらに近付くことができるだろう。「本校の試みはまだ始まったばかりで、ようやく形になったのが今年。来年、再来年と、さらに進化させていきたいです」(野口先生)

石川県立 金沢泉丘高校

小論文委員会 組織的に系統立てて 3年間を指導

1 金沢泉丘高校の取り組み

学校全体で「小論文委員会」を常設
'97年度より各学年の代表及び各教科の代表ら
15名で構成された「小論文委員会」を設置。
学校全体で小論文指導を組織化することにより、
問題作成や採点の基準作り、添削など手間がかかる作業を
分担してスムーズに行えるようになった。

2 3年間を指導

3年間で「論理的思考力」を養成
1年次は文章要約から時事問題に関心を持たせ
2年次には課題について自分の意見を述べさせ
3年次に志望する大学の入試に対応できるように
正確な知識に基づいた論述力を養成する。
3年間を通して論理的思考力を身に付けさせる。

3年次の夏からは入試対応の小論文指導に
5日間の夏期後期補習では国語系、社会系の
グループに分かれて毎日2時間の集中講座を開講。
小論文を書かせ、生徒間の相互評価と教師による解説を行う。

夏以降は9月から、校内小論文模試を3か月連続実施。
センター試験後も、毎週2時間の演習、個別添削指導を行い、
3月の後期試験までしっかりフォローする。

石川県立 金沢泉丘高校

93年に創立100周年を迎え、前身の石川県立
金沢第一中学校時代からの卒業生は3万名を起す。
普通科と理数科合わせて1学年約400名。
99年度入試では金沢大の83名を筆頭に、東京大9名、
京大20名など、計341名が国立大に合格した。
部活動も盛んで、登山部などが活躍している。



夏休み

も後半に
差し掛か
った8月20日、宮崎謙治
先生と宮本雅春先生は、
それぞれの教室で生徒に
先ほど書かせた小論文に
ついて解説していた。

金沢泉丘高校では、3
年生を対象に毎年8月下旬の5日間、「小論文講
座」が開講される。今日はその第1日目。社会
系のテーマで5グループ、国語系のテーマで3
グループという編成で、各グループに生徒は十
数名ずつ。医療系や家政系など理系の希望者も
同様にグループに振り分けられる。

地歴担当の宮崎先生と宮本先生も社会系グル
ープを担当。生徒に与える課題はグループ内共
通で「資料を読んで発展途上国と先進国の食糧
問題を解決する手立てについて400字程度で
要約せよ」というもの。まず朝8時からの1時
間を使って小論文を書かせ、次の1時間で生徒
同士による相互評価と教師による解説を行う。

相互評価では「キーワードとなる言葉がきち
んと挙げられているか」「誤字・脱字がないか」
などをポイントとして提示している。「モノカル
チャー」「商品作物」「外貨」など、資料中に出
てくる基本的な用語の意味を理解していない生
徒が予想以上に多いことに宮本先生は苦笑した。
意味が分からないから資料中からキーワード
が発見できない。でも、まだ1日目。この夏の
講座で与える課題テーマは、1学期中に過去の

入試問題から担当者が議論を尽くして選んだも
のだ。要約課題を2日間やった後、意見論述課
題に3日間取り組ませる計画で、1日目の課題
テーマは比較的易しいが、2日目以降、内容も
書く分量もどんどんグレードアップさせていく。
経験上、この講座を受けると飛躍的に文章力
が向上する生徒が必ずいる。宮本先生は、期待
に胸を膨らませつつ、明日までに
評価を付けて生徒に戻さなければ
ならない小論文用紙の束を整えた。

「小論文の泉丘」 と周囲 の高校

や大学から高く評価されている同
校。3年次の夏休みの5日間に渡

夏休みの小論文講座は5日間に渡
って行われる。過去の入試問題
から精選した課題などに生徒は取り組
んでいく。3年間を見通して系統立て
られた小論文指導の一つだ。



金沢泉丘高校進路指導主任
山守志朗 Yamamoto Shiro

昭和21年石川県生まれ。
化学担当。同校は赴任10年目。
進路担当は8年目。小論文委員会の
座長。小論文で論理的思考力を
身に付けさせたい。



金沢泉丘高校進路指導課
宮本雅春 Miyamoto Masaharu

昭和36年石川県生まれ。
日本史担当。同校は赴任14年目。
小論文委員会に設立当初からかわり
事務局的運営係を務める。
「生徒との一期一会を大切にしたい」



金沢泉丘高校小論文委員
宮崎謙治 Miyazaki Kenji

昭和30年石川県生まれ。
世界史担当。3学年クラス担任。
同校は赴任11年目。「人類の歴史から
生徒が「生きる力」を知るような、
そんな世界史の授業をしたい」



金沢泉丘高校小論文委員
前田一弘 Maeda Kazuhito

昭和35年石川県生まれ。
国語科担当。1学年クラス担任。
同校は赴任10年目。国語系の
小論文指導に長く携わる。
ポリシーは「団結・共生・工夫」。

る小論文講座も、3年間を通して計画された小
論文養成プログラムの一環だ。それを支えるの
が各学年・教科の代表、進路指導と図書を担当
者ら15名で組織されている「小論文委員会」だ。
委員会の座長を務める山守志朗先生は語る。
「ここ数年、中学校までのゆとり教育の影響
が、社会的な風潮なのか、中学校では成績が下



ツブクラスのはずの、本校に入学してくる生徒たちの知識量、教養レベル、表現力が低下してきていることに気が付いたんです。聞けば、周囲の高校も、大学側も非常に危機感を抱いている。そこで、学校を挙げて小論文対策に取り組み、3年間かけて論理的な思考力を養成しようというコンセンサスができたのです。それで'91年度から3年生の小論文指導のために機能してきた『小論文小委員会』を、'97年度からは1年生、2年生の担当教師も巻き込んで『小論文委員会』として系統的指導に拡大したのです。

まず1年次では、夏休み中に「新聞の社説やコラムから興味のあるテーマをピックアップし、要約する」という課題が全員に与えられる。休み明けにクラスの生徒を数人ずつ班分けし、それぞれの要約文と元ネタの記事を回し読みさせて、クラスで優秀作1点と佳作2点を選出する。さらに学年として最優秀作1点、優秀作3点、佳作5点が選考されることになっている。

1学年クラス担任の前田一弘先生は、要約の目的は、書くことよりも読むことにあると言います。「まず、新聞を読むという習慣を付けさせること。それから他の生徒の書いた要約と、それに添付された元ネタの記事を読むことで、自分

数科クラスの生徒に対して「白山へのフィールドワーク」をレポートにしてまとめさせるといった独自の課題を与えている。これらの取り組みの浸透度こそ「小論文の泉丘」たる所以だ。

じっくりと基礎を

身に付けた生徒たちは3年次の6月、具体的に入試対策としての「小論文対策ガイダンス」を受ける。

「その後の小論文講座を受講する生徒の中で実際に入試で小論文を受験するのは毎年50名から80名。しかし、小論文講座を通じて養成される教養や論理的思考力は大学に行ってから必ず役に立つ。受験のためというよりも将来のために、できるだけ受講して欲しいと、生徒に対して教師全員で働き掛けています」(山守先生)ガイダンスでは、文理に分かれて小論文を課す大学の出題の特徴及び難易度や、今後、同校

が関心を持たなかった分野の時事的な問題に触れることができます。要約という作業と、人の文章を読むという作業を通じて、小論文を書くのに必要な最低限の時事的な知識や常識を身に付けさせることが、この課題の目的です。

冬には小論文の校外模試を実施し、自分の文章に対する客観的評価を得ることで「自分の文章には何が足りないか」「今後どんな知識を身に付けていくべきか」を考える機会としている。

2年次も

夏の課題、秋の校外模試という枠組みは1年次と同じだが、目的が「与えられた課題文章について自分の意見を論述する力を養成すること」に変わる。この夏の課題は文系が「福祉と共生」「学ぶということ」、理系が「インフォームド・コンセント」「科学・技術・社会の関係」、共通テーマが「現代社会と病氣」。選んだテーマについて800字程度でまとめ、9月早々に同じテーマの生徒同士で読み合う。テーマを絞っているのは、この読み合わせをスムーズに行うためと、文系理系それぞれのベースとなるような共通の知識を生徒に持たせるためだ。

さらに、全学年共通で知識を増やすための場として年2回程度、知識人や著名人を招いてで行われる小論文対策のスケジュールなどが説明される。スケジュールを見ると、前述の夏休み5日間の講座の他、7月、9月、10月、11月と小論文模試の頻度が高いことが特徴だ。

7月は校外模試、後は校内模試です。校内模試は国語系、社会系、理科系に分け時事的なテーマを中心に、入試予想問題にもなるような実践的なスタイルで行います。社会系の出題は3回の模試を地歴公民科担当6、7人で分担し、問題作成や採点の基準作りを行います。作成された問題は地歴公民科担当全員で吟味を重ねます」(宮崎先生)

「国語系ではチーフが中心に問題と採点基準を作成し、その仕事を補佐するサブが付くという形で進めています。採点はチーフとサブが共同で行います」(前田先生)

これは採点に個人差が出ないよう、添削の負担が誰かに偏らないようにと、固まった方針だ。

また「小論文委員会」や教科ごとのミーティングで、日頃から情報交換を行い、小論文が入試で課される生徒を教師全員で組織的に指導している。そして、9月の校内模試以降は、志望校別、分野別の指導分担任体制を整え、添削指導を分担している。

「答案を返すと、そのテーマについて個人的に書き直してみる生

各 学年・教科の代表などで構成される「小論文委員会」が、生徒の論理的思考力の養成を目標にした同校の3年間の小論文指導をリードしている。



講演会を実施している。講演についての感想を文集にして講師に渡したり、一番印象に残った箇所を要約させ、それについて賛否を述べさせたりと、小論文対策に活用されている。

また、図書課と連携して参考図書の充実を図ったり、教科内で小論文指導の教員研修を実施するなど、組織的指導体制の確立を図っている。さらに教科独自で小論文対策を行うケースもある。例えば、理科では夏休みに理科的な内容を扱った本を1冊読ませ、要約を書かせたり、理

徒 類似のテーマで書いてみる生徒も出てきます。そんなやる気のある生徒からの働き掛けにはできる限り対応したいですね」(宮本先生)

そしてセンター試験後、希望者は週1回、2時間続きの小論文講座を受講することができ、「前期試験で失敗した生徒が、同じ大学の後期の小論文試験で合格したときはやはり嬉しいですね。ここ数年、そういったケースが確実に増えているんですよ。小論文はどの科目よりも逆転しやすい科目だと思います。だから生徒には諦めずに頑張ってください」(前田先生)

最後まで逆転を信じ、指導に当たる教師の存在は、生徒にとってどれほど心強いことだろう。「理系の場合、特に医学系へ進学した生徒から「小論文講座を受けておいてよかったと、大学に入ってから実感した」という声を聞きます。目先の受験だけではない本校の取り組みの意義を、生徒も理解してくれたときの喜びはひとしおです」と、山守先生もつなす。

この数年で校内の小論文指導についてのコンセンサスが得られ、学年間のネットワークもできてきた。今後の課題は、英語科との連携だ。「英文は時事的な問題から物語まで、国語科、社会、理科などのあらゆる範囲で出題されます。英語を含め、教科を越えた総合的な力を生徒に持たせてやりたいですね」(宮本先生)

国語系、社会系、理科系の小論文ネットワークにさらに英語系が加わることで、金沢泉丘高校の小論文指導は、より生徒の知識を総合化させる取り組みへと変わっていくのだろう。

